

分科会
高等学校

第12分科会

福岡県立修猷館高等学校

第13分科会

福岡県立福岡工業高等学校

研究主題

共に学び、生きる力をはぐくむ体育授業の創造

－失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ－

福岡県立修猷館高等学校

1 研究発表の概要

発表者：修猷館高等学校 教諭 岡本 圭吾

(1) 主題について

大会主題の「運動の楽しさを味わわせ、(生涯にわたって運動に親しむ) 体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」は、運動が「わかる・できる・かかわる・活用する」喜びや楽しさの体験のなかで、運動に親しむ体育的学力を確かなものにすることである。このことは運動・スポーツの日常化が進み、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質・能力の育成につながる体育授業の創造を目指すものであると考える。

この大会主題の趣旨に関しては、本校の教育方針や保健体育科としてここ数年実践してきた内容と一致している部分が多い。例えば、それは「10年後・20年後に向けた社会で通じる力の育成」や、「マイスポーツを獲得し豊かなスポーツライフにつながる能力の育成」に重点を置いた指導等である。

本校の研究主題は、大会主題の趣旨を踏まえ、「共に学び、生きる力をはぐくむ体育授業の創造」と設定した。これは、本校の教育に受け継がれてきた時代を超える普遍的倫理である「世のため人のための教育」「自由闊達」「不羈独立」「質朴剛健」等を重んじ、その特性を十分に生かした教育活動のなかで、中学校までに育成された体育的学力を更に大きくし、チームワークを尊び、言語活動の充実や道德教育の推進、更には、得た知識・技能を「活用する・応用する喜び」に重点をおいたものである。本校の主題設定の理由は、以下の2点である。

(2) 仮説について

「失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ過程」の在り方を、以下の着眼点Ⅰ・Ⅱ・Ⅲから具現化すれば、生徒は獲得した体育的学力を活用する能力やたくましい体、そして豊かなスポーツライフのリードオフマンを育てることに迫ることができるであろう。

着眼点Ⅰ P D C Aサイクルの活用

着眼点Ⅱ 指導の重点化

着眼点Ⅲ 自己評価の活用

2 公開授業

(1) 第2学年 単元名「ダンス」

指導者：鈴木 須美子

着眼点Ⅱ・Ⅲの「指導の重点化」「自己評価を活用する」取り組みア・イ・ウ

ア リーダーに続け <心と体ほぐし>

仲間と自由に関わりあいながら心も身体もリラックスして、声を出して笑ったり、自然に歓声があがったりすることで、仲間と一体感が持てるようなウォームアップを行う。

- ・ペアでストレッチをして伸びる感覚をつかみ取ったり、緊張を解いて脱力したり、相手の柔軟度に応じた力の加減をしながら、楽しいコミュニケーションを生み、仲間との一体感を育てる運動を行う。(スキんシップをとりながら体の調整)
- ・割り箸なしで、体を伸ばし強弱を強調するために、方向変換や高さを変える等動きを繋げる。特に顎・指先・つま先まで神経を行き届かせる。
- ・リズムに乗って心を弾ませ体を極限まで使い「日常の自分」から「表現の世界へ」スイッチを切りかえる。



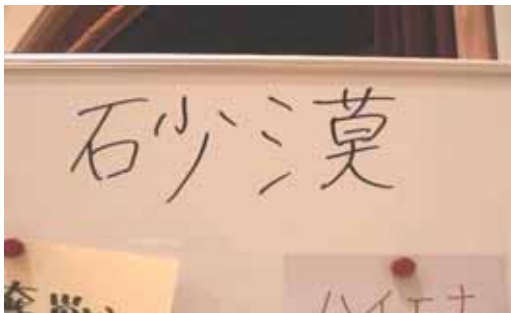
二人組で、体を極限まで動かし「表現の世界へ」スイッチを切りかえている様子

イ 動きのイメージをふくらませ動く

音楽・色・音・形から動きのイメージをふくらませ、それらを言葉に変え即興表現を行う。

- ・曲のイメージからテーマを決める。

曲：「ライオンキング」より



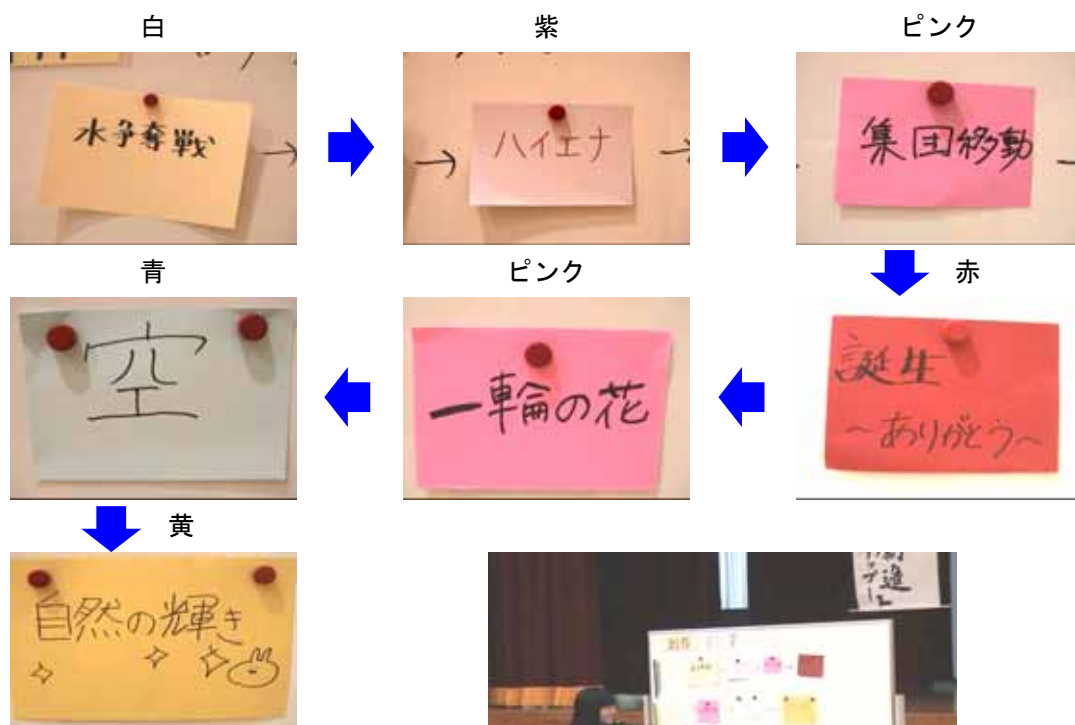
見学者による発案テーマ「砂漠」



各色に分かれサブテーマ決めをしている様子

- ・色シャツごとにグループになり、色から連想できるものをサブテーマとし、イメージを出し合う。(直感的にとらえたイメージを表現する)
- ・「はじめーなかーおわり」で構成する。

<サブテーマ>



「砂漠」をテーマに、色ごとに連想されたサブテーマを並びかえ、ストーリーを説明している様子

- ・イメージしたものについて、さらにくわしく動きや特徴をとらえる。
- ・強調する部分を明確にする
- ・時間・空間・力の変化をつける
- ・感じを込めて表現する
- ・緩急強弱を最大限に強調する



動きを出し合っている様子

ウ 動きの引き出し方

擬態語や擬声語や口伴奏を使う。 教師の言葉かけを行う。



*動きの変化を強調するために、静と動をはっきりさせるアドバイスをを行った

エ 中間発表で5つの観点から課題を見つけ改善する着眼点Ⅰ（PDCAサイクルの活用）

お互いが見せ合うことにより、よい動きのポイントを見分け、課題解決を行う。

* 5つの観点

- ①伝えたいことが強調できている。
- ②緩急強弱のある動きである。
- ③体を極限まで使っている。
- ④表現力豊かである。
- ⑤動きの要素が使われている。

○発表の様子



①白：水争奪戦



②紫：ハイエナ



③ピンク：集団行動



⑥青：空



⑤ピンク：一輪の花



④赤：誕生～ありがとう



⑦黄：自然の輝き

<生徒の感想>

⑭本時の課題：色のイメージ(曲のイメージから)

1.今日の課題をやって感じたこと
曲のイメージによって、それぞれの色から生まれるイメージは大きく異なり、また、その色に直接関係、かたがたイメージから動きによってうまく表現することかできるのだと感じました。

2.課題から出たイメージ
私は赤、ブル-70でしたが、赤という色素をもつものでなく、赤という明るい色から自然なイメージから「誕生」というイメージが生まれました。

3.友達作品を見ての感想
動きはイメージによってとても多様だったので、新しいアイデアをもつことができました。

精一杯助けた		創意が湧いた		友達と協力できた			
Yes	No	Yes	No	Yes	No		
⑤ 4	3	2	1	⑤ 4	3	2	1

⑭本時の課題：色のイメージ(曲のイメージから)

1.今日の課題をやって感じたこと
前回、紫で(今回ピンク)だったので、イメージが全然違った。前回よりもやわらかい動きが増えた。

2.課題から出たイメージ
花+花→枯れそうになりながらも咲きほこる。→強い動きややわらかい動き。

3.友達作品を見ての感想
カノンがそれいってきていると迫力がでるのだからとわかった。すごい!!

精一杯助けた		創意が湧いた		友達と協力できた			
Yes	No	Yes	No	Yes	No		
⑤ 4	3	2	1	⑤ 4	3	2	1

◎ダンスの学習を通して学んだこと

まず、今日のクラスでの発表では、皆今まで身につけてきたリズムの動きや、アウセなどの表現要素を使っておどることができたと思います。1人1人の役割があり、それに合った動き、表情などのことも伝わりやすかったし、おもしろかったです。音楽やシャツの色も雰囲気をつくってくれてよかったです。

最初はダンスが苦手というもあり、あまり上手におどることができなかったのですが、授業を重ねるうちに体が勝手にうごくようになっていくまで成長することができました。ダンス学習を通して、ダンスの要素には数多くの種類があるということがわかりました。「よう」「どき」などは予想をしないような要素で、とても興味深いものでした。また、ダンスは色々な物や情景を表現することができると知って、ダンスを楽しいと感じることができたことも新鮮でした。今回学んだことを運動会などにつなげていけたらいいです。

今までは創作ダンスよりも、あまり楽しそうなイメージがなかった。しかし、今回ダンスの授業を行ったことで、自分自身をつかい身体で表現すること、イメージから動きに変えていくことに関して、すごく楽しさを学べた。中でも色からダンスをつくっていくのは、それぞれの色に対する考えに特色があって、おもしろいものができたと思う。はじめは恥ずかしがりながらだったダンスも後半は自ら積極的に動いていた。多くの先生方が来られた際には、皆かなり上手にダンスを行っていたと思う。来年の運動会が少し楽しみになってきた。私たちが主体となってつくっていく創作ダンスだから、今回の経験を生かして、いいものをつく、といきたい。そして先生を泣かせたい。とても楽しい授業をありがとうございました！ あー泣かせてくれ。

(2) 第1学年 単元名 「体育理論」

指導者：藤原 誠

今回公開した授業は、6時間中の5時間目の授業である。そこで、これまで実施してきた授業の流れを簡単に説明したいと思う。

1年時では以下の4つの学習内容を6時間かけて実施する。

- ア スポーツの歴史的発展と変容
- イ スポーツの技術、戦術、ルールの変化
- ウ オリンピックムーブメントとドーピング
- エ スポーツの経済的効果とスポーツ産業

1時間目は体育理論の目標や学習内容、授業形態などの概要を説明し、体育理論の重要性について話をした。スポーツの歴史的発展とスポーツの文化などにも触れた。

2時間目はスポーツの歴史とは何かについて、国際スポーツと民族スポーツの解説を行い、学習シートを活用しながら民族スポーツと現代スポーツの結びつきを考えさせた。

3時間目は今回の学習内容である「スポーツの技術、戦術、ルールの変化」と「オリンピックムーブメントとドーピング」について一斉講義し知識を獲得させた。

4時間目と5時間目に課題解決のための課題学習を2時間取り入れ、最後の6時間目は「スポ

スポーツの経済的効果とスポーツ産業」の学習内容を一斉講義で行うこととする。

今回実施した課題学習は、あらかじめ課題テーマを3つ設定し、その課題テーマをもとに、各グループでサブテーマを決めて発表を行うという展開である。

＊課題テーマと各グループのサブテーマ

①スポーツの技術や戦術、ルールの変化について具体例を挙げる
・バスケットボールのルールの変遷とそれに伴うプレーの変化について
・近年、メディアでの露出が増え、幅広い層に支持を得ているフィギアスケートについての徹底研究
・相撲の歴史と国技として相撲の在り方
・テニスが人々にとってどのようなスポーツだったのかを探り、より親しみやすいスポーツにするにはどのようなことが必要かを導く
・ラグビーの起源、ユニホーム、ルールなど現代ではわからない知識
・「野球」ドーム球場やルール、歴史、技術など今の野球ではわからないことが多い、「意外だ」と思える新たな発見をする
②オリンピックムーブメントについて
・オリンピックの平和貢献
・オリンピックムーブメントと環境問題の関係とその活動
・エケケイリア ～オリンピック停戦についての考察～
③ドーピングについて
・ドーピング規則は本当に必要か？
・人と科学の記録 ～遺伝子操作など～
・ドーピングとプロテイン

課題学習発表は4、5名の生徒が発表し、25名の生徒がその発表を聞くという形をそれぞれ4ブース設置し、それを3クール行った。

今回実施したクラスは、1年生3クラスの120名を対象とした授業である。これは、本校の体育授業のクラス編成が、11クラスを3つのグループに分けたAというグループの集団である。当然、この体育理論は年間計画の中で6時間配当されていることから、他のグループの8クラスも同じ授業を展開している。

いずれにせよ、クラス単位の授業ではなく実技授業の形態同様にA、B、Cの集団で一斉授業を行ってきた。理由は、今までも各領域で各担当者が種目理論を行っていたが、今回の体育理論は、全てのスポーツに共通する概念的・理念的な知識を中心に教えなければならないこと、またスポーツを「世界一体化」としてとらえていくという教師側の共通認識をもつために、合併授業の形態で行ってきた。今後は、実際1年間やってきた反省を活かし、実施方法や内容等を検討していきたいと考えている。

生徒たちは課題学習の取り組みの中で、主体的に発表したり学んだり、仲間と探求したりして活動的であった。発表当日は緊張気味で声が通らない部分もあったが、各グループで調べた内容は、知識の深さと学習に対する意欲の高さを感じさせた。

体育理論は初の試みであるため、我々もまだまだ試行錯誤の最中であり、今回公開した授業や、年間・単元計画もこれでいいのかと不安に思っているところである。

最後に、高等学校3年間の生徒の成長と、体育好きの生徒が少しでも増えること、そして、生涯にわたってスポーツにかかわるための知識の定着や、体力の向上を目指して日々授業を行い、生徒と共に成長していきたいと思いつけている。

3 研究協議

(1) 分科会研究構想について

○着眼点Ⅰ・・・PDCAサイクル活用

PDCAサイクルを活用した運動の学び方を理解し、効果的な学習の仕方を習得し学び方を選択したり、工夫したりして課題解決していく取り組みである。

○着眼点Ⅱ・・・指導の重点化

指導と評価の一体化を図り、発達段階に応じて目標や指導内容の明確化を行い、評価を踏まえた単元構成と指導者の具体的な支援を工夫する取り組みである。

各発達段階（ステージ）で、練習方法、運動の観察方法、課題設定の方法が異なる。

○着眼点Ⅲ・・・自己評価の活用

目標と自己評価の一体化を図り、生徒自身のめあての明確化と観点別学習、観点別の自己評価を重視する取り組みである。

(2) 公開授業について

①ダンス

アクセントをつけメリハリのある動きを行うために、ウォーミングアップでは、二人組による割り箸の動きを取り入れたことで、体を伸ばしきって高さ・臍の向き・床に面している体の部位の変化を急激に行うことを意識させることができた。生徒は、曲の雰囲気を上手くつかみ取り、感情を表現しながら伸びやかに体を極限まで動かし、気持ちよく心と体をほぐすことができた。

教材の工夫では、動きのイメージをふくらませるために、曲を聴かせテーマを決め、色シャツごとに色から連想されるイメージからサブテーマを決めさせた。今回の授業では、テーマ：「砂漠」と、色ごとのサブテーマの全体構成は、見学者が発案した。見学者のユニークな全体構成の発想で、授業が一段と盛り上がった。

教師の言葉掛けでは、動きを引き出し目標と自己評価の一体化を図ることができた。

課題を共有化し解決方法をさぐることは、今までの学習の積み重ねが、「失敗と成功を積み上げていくステップアップ」の仕組みに繋がった授業展開となった。

課題解決カードを活用した、グループでの話し合いは、①サブテーマ決め ②「はじめ」「なか」「おわり」での構成 ③隊形づくりを行い、各人の動きは即興で行う。密集の隊形などは、アクセントの取り方を合わせておくこと。動きは、イメージをつかみ取り即興で表現する。短時間での創作活動だったが、イメージをふくらませながら即興表現を行う学習の積み重ねが生かされ、スムーズな創作活動ができた。

毎時間の自己評価の感想により、指導の明確化をはかることができ、技能向上のための支援を更に工夫することができた。また、生徒の成長が動きに繋がったとき、指導の方向性を明確にすることができた。

②体育理論

●3年間の学年目標について

本校の体育理論は、研究の概要に記載されている「失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ」という考えを基に実施されている。

1年生の習得ステージは、スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴を学び、スポーツに「かかわる」楽しさを習得することである。

2年生の活用ステージは、1年次で習得した知識や理解から生まれる新たな創造で、運動や

スポーツの効果的な学習の仕方を主体的に学ばせることである。具体的には1年次よりステップアップさせた課題学習やディスカッションである。

3年生の応用ステージは、2年次で主体的に学んで生まれた知識と活用力を活かし、各ライフステージにおける運動やスポーツの楽しみ方を模索していくということがめあてになる。そうした3年間のステージで獲得してきた体育的学力を、社会でのリードオフマンとして活用できるような能力の育成を目指している。

このように、各学年のめあてを基に失敗と成功を繰り返し、楽しさをステップアップしていくという形態になっている。体育理論においての「失敗」「成功」「楽しさ」は以下の通りと考える。

- ・失 敗（学習内容は理解できたが活用力や実践力には結びつかない。）
- ・成 功（自分の生活に活用する力と、自ら探求する学びの姿勢が身につく。）
- ・楽しさ（今まで知らなかったことがわかるようになり、生活やスポーツ活動の場面に生きる。知的好奇心をくすぐる。）

●1年生の単元計画について

1年生のめあては「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴を学んで、スポーツに「かかわる」楽しさを習得する。」ということをめあてにしている。スポーツにかかわるというのは「プレイをしたり」「観戦したり」「運営サポートをしたり」「今回のように調べる」ということである。

本日行った授業は「スポーツの技術、戦術、ルールの変化」「オリンピックムーブメントとドーピング」で、なぜこの学習内容を選んだかということ、まずスポーツはいくつもの種目がある中で数多くの種目を理解してもらいたいということ。オリンピックムーブメントについてしっかり把握すること。そして、現在行っている体育実技に結びつくような理論になることを考えたからである。

そのため、「歴史」と「文化」は共通して学ばせ「スポーツの歴史的発展と変容」は2時間かけて一斉講義を行った。

そして、「スポーツの技術、戦術、ルールの変化」「オリンピックムーブメントとドーピング」の学習内容も生徒に投げ渡しの課題学習ではなく、1時間の一斉講義の後それぞれの課題解決のために課題学習を取り入れた。

最後に、「スポーツの経済的効果とスポーツ産業」は今後、スポーツに親しむためには多方面にわたって支えられ、構成されているということを3月に一斉講義を行いたいと考えている。

●課題学習について

本日の目標は課題テーマ毎にそれぞれ設定した。

〔テーマ1〕 いろいろな種目の技術・戦術・ルールの変化を自分たちで調べ、その種目の特性や現代スポーツの在り方を学ばせるようにした。

〔テーマ2〕 オリンピックムーブメントについて理解させ、いろいろな角度から世界平和と人々の友好関係について調べさせ、そこで自分たちの知識や新たな発想を加え仲間と探求していくここに重点をおいた。

〔テーマ3〕 基本的にはオリンピック競技の精神を理解し、ドーピングはフェアプレーの精神に反するということと健康被害をもたらす行為であるということを理解させるようにした。

いずれにせよ、仲間と探求し知的好奇心をくすぐるような知識を獲得することで、スポーツに「かかわる」楽しさのレベルを向上させることがめあてになる。

具体的な手だては、①生徒たちが主体的に学ぶという場の設定を考える。例えば、今回の課題学習であったり、グループディスカッションや一斉授業の工夫である。②学習シートを活用した取り組みでPDCAサイクルを活用し、試行錯誤しながら課題解決を行わせることである。

今回1番重点を置いたことは、発表までの事前指導で、各テーマ毎に1名の教師が担当し、発表のための調べ学習で終わらせるのではなく、ねらいの明確さ、情報収集の確認、表現の仕方、資料の確認、課題学習の取り組み方などを昼休みや放課後を利用しながら打ち合わせを行ってきたことである。

●成果と課題

- ・授業の中で、積極的に活動できる雰囲気や場を設定することにより、自ら探求する学びの姿勢と生きる力をはぐくむことができた。
- ・失敗と成功の体験を通して新たな高い目標へとチャレンジし、今まで知らなかったことがわかるようになる知的好奇心をくすぐる楽しさを味わうことができた。
- ・学習内容は理解できるが、活用力や実践力に結びつけるためには時間数が足りないので、座学以外の時間や生徒の実態に応じた指導の在り方を工夫する。

4 指導助言

指導助言者：鹿児島大学 准教授 廣瀬 勝弘 先生

教師は、子どもあるいは生徒を新しい世界に目を向けるための「導き手」という役割を担います。今回の授業では、改めて、教師という仕事は、道しるべを示してあげることが大切であるということ、さらには、幼・小・中・高の発達段階に応じ、導くための手段や方法に工夫を行いながら、授業づくり及び実践を行うことの重要性を再確認致しました。

生徒らが、目標と課題に向かっていくためには、教師は教え導いていかなければなりませんが、生徒の力を効果的に引き出すためには、動きを観察し、手を差し伸べる時もあれば、手を出さずに観察し続け、待つことも大切であることは言うまでもありません。教師は、「じれったい」とか「もっと教えた」などの葛藤やジレンマを感じる事が数多くある中で、生徒が主体的な技能向上を目指すためには、我慢をしながらも、上手に導いていくことが必要だと考えます。

さて、ダンスの授業は、改訂指導要領では中学校1年生から全ての生徒が学習すべき内容となりました。したがって、高校の授業づくりでは、中学校では何を学習し習得してきたのかを押さえておく必要があります。

本日の授業では、「音楽に合わせてやすく動くことができた。作りやすいテーマであったので、動きやすかった。自然と動きが出てきた。」という生徒自身の感想が示すとおり、授業をつくる側の先生の意図、すなわち、「動きづくりとその発展」が、生徒に確かに伝わっていたのだと考えられます。ダンスの授業づくりは、音楽をベースに構成したり、動きをベースに構成したりなど、様々ございますが、本日の授業では、動きそのものを大切にしながら、多様な動きのイメージを生徒らが相互に出し合い、そして、共有することを通じ、特に、集団での動きをつくることを目指す構成になっていました。その結果として、生徒一人ひとりが、伸び伸びと動いていたと思います。

さて、書道の世界では、**摹書**（コピー）と**臨書**（なぞる）がございますが、運動の場合も動きを「真似る」とことは、どのスポーツ種目においても難しく、他者の動きを感覚のレベルまでくみ取り

ながら習得する必要があります。言い換えるならば、それは、あたかも相手の身体に入り込み、体を伸ばしたり、あるいは、動きに共感し、似せていくということになります。まさしく、それは、「コピー」ではなく、「なぞり」のレベルで学習を進めるということであり、とても重要なポイントになってきます。

本日の授業では、グループにおける「なぞり」を目ざし、動きづくりを中心としながら、動きのイメージをふくらませ、音楽に乗り、生徒らは活動を進めていました。そのため、グループでの動きの共感がとてもできていたため、生徒らが活用していた動きそのものは、難しい内容ではありませんが、一体感を持った動きを構成していたグループが、数多くあったかと思います。

小学校では、当初「コピー」をしながらの学習が展開され、その後、「なぞり」のレベルでの動きづくりを中心とし、とりわけ、主に個人で完結する運動の習得が目ざされます。一方、ボールゲームの学習では、個人で完結する学習から、相手や味方など他者と合わせることや、何よりも、ボールと合わせるなどの、複合的な関係の構築を目ざし、学習が展開されます。ダンスも同様に、「音楽に合わせる」あるいは「テーマに合わせる」ことを、自分や仲間と共に、高いレベルで学習を展開することが目ざされることはいうまでもありません。

先生のお話によると、単元の一時間目では、恥ずかしさで体が動かない生徒が多かったようでしたが、本時では、恥ずかしがらずに表現ができていました。授業を構成・実践する先生自身の発達段階や、生徒の能力に適した、導くための手段の工夫が、とてもよくできていたのだと思います。

領域や種目が替わっても、子どもたちが考え、創っていく学習は、学校教育の様々な場面で生きていきますので、それぞれの単元で学んだことを、次に学習すべき単元に、どのように生かしていくかという教師自身の導き方については、今後の授業づくりに活用されるべきであると考えられます。

さて、体育理論は、改訂指導要領において、新たに追加された内容を含むため、今後、多くの実践発表が期待されるところです。本日の授業では、新しい体育理論の挑戦的な1つの実践が展開されました。オリンピック・ムーブメントに代表される、スポーツの歴史や文化を学習することは、これまで学習していたスポーツや技の内容について、さらに探求することを可能としています。つまり、体育理論という座学の授業を通じて、スポーツや運動に含まれる意味や価値を学習することになります。

さらに、リレーでタイム向上を目ざす場合を考えると、テイクオーバーゾーンをいかに使うのか、という具体的な解決手段を検討することが考えられます。リレーでは、「スピードを継承する」ということが、効果的に成果を出すための、実は、見えない学習すべき内容になります。一般的には、運動技術を習得し、上達するためには、目標となる動きを合理的に解決する仕方の獲得が目ざされますが、その仕方を支えるための理論的な背景を理解することが、さらに大切なことであると考えられます。つまり、体育の学習では、教師自身が、見えない学習内容を、見えるかたちに加工ならびに修正することを通じて、生徒らに示していく必要があります。体育理論では、教師は、このような内容を含みながら、授業を構成することが求められることになります。生徒らが、運動習得を目ざすべく理論的な背景の理解は、自身の身体あるいは、今後、体育・スポーツ活動に積極的に関わる素養を身につけることにつながることを期待されます。

最後に、今回の授業研究を通じ、修猷館高校の先生方ご自身が、それぞれ、大きな成長を感じたのではないかと思います。授業を構成するためには、目標を設定し、その目標を達成するための内容や円滑に進めるための具体的な方法を策定し、さらには、その効果をみとる評価の観点や方法

の設定など、授業を実践するまでには、検討課題は多岐に渡ったかと思われます。本日の、いきいきとした生徒の姿から推察されることは、修猷館高校の先生方が、同僚性を高め、相互に学び合い、そして学び続ける姿勢を持たれた結果だと感じます。教師自身が学び続ける姿勢を示すことが、何よりも、生徒の力を引き出すことの源泉となることだと考えます。

簡単ではございますが、以上で、私の指導助言を終わりたいと思います。

本日は、ありがとうございました。

5 ま と め

(1) 成果

着眼点からみた研究の成果

○着眼点Ⅰ・・・PDCAサイクル活用

指導者側のPDCAの活用はもちろん、生徒が、失敗と成功のかかわりの中でPDCAサイクルの効果と実践方法を理解し学び方を選択したり工夫して、課題解決に向けて運動の学び方が習得ができた。また、体力の向上や、できる（技能）わかる（知識）かかわる（態度）等の体育的学力の習得ができた。

○着眼点Ⅱ・・・指導の重点化

発達段階に応じた目標や指導内容の明確化を行い、評価を踏まえた単元構成と（語りかけや教材の工夫「音、用具、音楽、題材」を含め）具体的支援の工夫により、発達段階に応じた合理的で計画的な運動が見られた。

○着眼点Ⅲ・・・自己評価の活用

生徒のめあてと自己評価が一体化する取り組みを図り、観点別学習や観点別評価を行い、指導内容の明確化などで、（評価基準の提示）生徒自身が自己評価をしやすくなった。「知識・技能」を活用することができ、応用するPDCAサイクルの活用ができ、自己指導力・評価力、課題解決力の向上につながった。

(2) 課題

具体的支援（指導力の向上）

1. 生徒の学びの姿勢や過程を多面的に見取る
2. ねらいに生徒たちで迫るための授業展開 (モデル提示)
3. 日常化につながる主体的活動の場の工夫

体力向上のためには、体育実践の時間の確保も大きな課題である。

研究主題

運動の特性や魅力に応じた体育的学力をはぐくむ体育授業

- 運動の系統性を踏まえた授業展開の工夫 -

福岡県立福岡工業高等学校

1 研究発表の概要

発表者：福岡県立福岡工業高等学校 教諭 犬丸 嘉章

(1) 主題について

これまでの本校の保健体育科の授業において、各学年ごとの発達段階に応じた指導目標をたて、基礎基本を大切にしながら、生徒の自主的・自発的な活動を促すことにより「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成し、健康の保持増進及び体力の向上を図ること」を目指してきた。また、各領域を通じて効果的、能率的で安全な行動ができるように、集団号令走・福岡県民体操・ストレッチ運動・補強運動等といった集団としての学び方を身につけさせている。

大会主題である「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」を踏まえた具体的取り組みでは、下記の3つの視座を持ち体育授業の実践を試みた。

各運動領域ごとに体系化・明確化された指導内容の充実。

運動についての理解や運動の合理的、計画的な実践。

中学校の内容・目標を踏まえた系統性のある指導のあり方。

(2) 仮説について

生徒の発達段階を踏まえた指導法とする着眼点、を具現化すれば、「できる喜び」「わかる喜び」「かかわる喜び」を「活用する喜び」へと広げる過程で「体育的学力」を着実に身に付けていくことができるであろう。

【着眼点】指導する内容を体育的学力である4観点「技能」、「態度」、「知識、思考・判断」を踏まえて分析し、ねらいを明確にした上で環境を構成し、運動教材の選択・開発をする。

【着眼点】体育的学力を確実に身に付けられるような単元の構成とその構成に応じた具体的な支援を工夫する。

【着眼点】単元構成に応じた評価規準の設定とその評価を踏まえた具体的支援の工夫。

2 公開授業

(1) 第1学年「柔道」

授業者：池上 久敏

研究の実践

ア 運動教材の選択・開発（生徒の分析と問題点）『着眼点 より』

柔道を経験した者が少なく、初心者対象の授業内容

40人での授業・男女共修・試合場一面（限られたスペース）

を克服し、柔道における「体育的学力の確かな定着」を図るためには、生徒個人が「見取り稽古」の観点を備え、授業に取り組むことが最良と考えた。その手立てとして、ラグビーの練習で用いられる「グリッド」を用いた学習を実施した。

イ 運動する喜びを味わわせるため 『着眼点 より』

グループ学習を毎時間実施した。練習段階にあった内容で取り入れ、活性化を図った。その結果、お互いに教え合ったり、試し合ったりする相乗効果が見られるようになった。また、言語活動を活発にさせるため、必ず生徒相互にアドバイスをさせるように指導した。初めは、否定的な態度や意見も見られたが、授業を重ねるごとに肯定的発言が目立ち、研究授業の頃には、互いの技能や態度のついて的確に指摘し合ったり、賞賛する発言が多く聞かれ、生徒の主体的な授業への取り組みには素晴らしいものが見られた。その結果、生徒の思考・判断力は大きく向上した。

受け身（５人グループ） 技練習（２人身長・体重が同じ）

得意技（担ぎ技・腰技系） グリッド（６～７人グループ）

ウ 評価を踏まえた具体的支援の工夫 『着眼点 より』

シラバスによる授業内容やスキルテストの提示

柔道ノートを活用 自己評価や形成的評価を行う『知識・理解、思考・判断』

教師の観察シート『関心・意欲・態度、運動の技能』

毎回の授業で柔道ノートを活用した。授業内容を明記するだけでなく、反省や他者へのアドバイスを盛り込み、見取り稽古の下地を養うことが出来た。

形成的授業評価を毎回行い、授業の見直しに活用した。柔道の授業に対して低かった評価が、技の学習から生徒の意欲が高まり、グリッドを使った学習では、最高潮に達する結果となった。また、観察シートに記録することにより、「つまずき」のある生徒や個人の課題を明確にして、次の授業では、生徒の問題解決を図るために授業改善を行った。克服させるようにした。どうしても出来ない生徒には、補講を行いクラス全員が力量をつけ達成感を味わうことができるよう指導した。

エ 課題と反省

学習指導要領改訂により次第に中学校における柔道を既習した生徒が、入学して来られる。高等学校では中学校の接続を踏まえた指導内容で授業を展開する必要がある。そこで、生徒の実態の把握と分析が必要になってくる。また、技能の習得の個人差があることが考えられるため、授業の改善にむけて工夫をしていくことが必要である。

授業においては、柔道の経験が浅い生徒や低い体力の水準の男子、女子など多様な生徒が指導の対象となってくるため、「NO柔道」の生徒を出さないようにオリエンテーションや導入の段階での工夫が大切である。また、技術的部分で、戦略を考えさせるためには、早く乱取りなどの実技に移行し、時間を多くかける必要がある。そのために、今回のグリッドプランの改善を考えた。 広さの工夫『男子・女子・技』などで変化 早い段階でのグリッドグループの活用『受け身や６種類の技のグループの同時進行等』 技のグループのローテーション ビデオの活用（ミラー効果の活用）等々、体育的学力を身に付けるために、これまでの授業を改善することで、より良い内容を目指し工夫していきたい。

研究の実践

ア 運動教材の選択・開発 『着眼点 より』

課題ボードの活用

各グループで課題ボード（作戦用ホワイトボード）を活用することによりボールを持たないときの動き方やオフェンスとディフェンスの位置関係等が理解しやすい。また、生徒相互に作戦を考えたり教え合ったりする場面が多く見られ、チームの課題解決にも効果がみられた。

視聴覚教材の活用

実践的な動きをイメージするのが不得意な生徒達にバスケットボールを題材にしたアニメーションDVDを見せることで、様々な試合の場面の動きを視覚的にイメージさせようと試みた。生徒達はそのプレーを真似て攻撃してみたり、ボールを持たないときの動きで、ギブ&ゴーやスクリーンプレーの動きを試してみたりするといった良い効果が得られた。

イ 運動する喜びを味わわせる単元構成と具体的な支援の工夫 『着眼点 より』

課題練習

「安定したボール操作」が出来るように個人やチームの課題に応じた基本練習を4種類の中から選択させ、行わせた。生徒一人一人積極的に授業に取り組み、楽しんで自分達の課題発見と課題解決に努められるように経験者に教えてもらうなど学び合いの姿が見られた。

課題練習

「ボールを持たないときの動き」を意識出来るように、4種類の集団技能（3on3）練習を取り入れた。生徒達はチームの特徴に応じて練習を選択していた。スクリーンを使った練習では課題ボードを使い「壁」のイメージを明確化して仲間と協力してシュートを入れることを考えさせ、試合に活かせるように工夫をさせた。

課題練習

苦手な生徒も積極的にプレー出来るように、ボールがリングタッチしたら、1点、リバウンドゲットで1点など特別ルールを設けた。そうすることにより、得意な生徒が苦手な生徒を活かしたり、助けたりする援助の場面が多く見られた。

ウ 評価計画を位置づけた単元の構成とその評価を踏まえた具体的な支援の工夫

『着眼点 より』

授業開始前アンケート、授業後の自己評価の実施

中学校での授業の内容、生徒の単元（バスケットボール）に対する意識や技能到達レベルを確認し、授業展開や指導計画、教材づくりに活用した。

生徒ナンバリングシステム、一人一役の実施

グループ8班を8色のゼッケンで色分けし、各班の班員をナンバリングした。スキルテストを実施し、1（バスケット経験生徒）を審判長、2（得意生徒）をスコア長、3（得意生徒）を道具長、4（苦手生徒）をマナー、安全長、5（苦手生徒）をムードメイク長にして、全員に役割を与えた。このことにより、生徒一人一人が自己の役割を積極的かつ責任を持って果たそうとする態度が見られた。また、生徒の学習の姿がナンバリングにより把握し易くなった。加えて、バスケットボール経験がある生徒や得意な生徒、苦手としている生徒の間で教え合い、学び合うという相乗効果が見られた。

授業後の自己評価の実施

毎時、授業終了時に生徒の達成度や満足度を学習ノートに記入させ、段階ごとの生徒の興味・関心や到達度を把握し、授業づくりの課題を明確化し授業の工夫・改善に努めた。

エ 課題と反省

入学時での技能、意識格差にどう取り組むか。

中学校と高校入学年次の接続をスムーズにし指導内容の体系化を図るために、生徒一人一人の単元（バスケットボール）の経験や技能レベル、中学校での授業内容を把握した。事前アンケートの結果からバスケットボールが得意な生徒と苦手な生徒の間に大きな技能や意識の差があった。このような生徒達の技能を伸ばし、いかに達成感や満足感を持たせるかが大切であり、授業内容や教材研究が必要であると感じた。

言語活動、コミュニケーション能力をどう向上させるか。

課題練習の中で、せっかく空間に侵入して、ボールがもらえる位置にいるにも関わらず、そのことを、言葉にして伝えられない生徒が多く見られた。チーム練習の中でもっと、瞬時に情報を伝えれば、さらに、高いレベルで試合が出来るようになるので、普段の授業から意図的に考えを表出させるような場づくりの工夫が必要であると感じた。

安全な環境をどう整備していくか。

安全の確保という観点から、5 on 5 のオールコートでの課題練習の際にぶつかったり、転倒したりする生徒が見られた。そこで、指導者としての安全に対する意識の向上と、コートの周りで見ている生徒がプレーヤーに対して、安全に対する目配りや声かけをするなど相互に意識し合うことを指導していく必要があると痛感した。

以上、課題や反省はまだ数多くあるが、体育的学力を身につけさせるために、これから、さらに、授業づくりの工夫に努め、生徒のために精進していきたいと考えている。

3 研究協議

（１）分科会研究構想について

【着眼点】運動教材の選択・開発

柔道の授業において、「初心者に対する柔道学習の工夫」を中心にした男女共修の学習を展開する。また、狭い柔道場のため「グリッドプラン」を用いて授業を進め、見取り稽古の観点を養い、安全や他人に配慮する生徒を育てる。

ゴール型の球技であるバスケットボールの指導において、ボール操作やボールを持たない時の動きを高める様々な教材・教具を取り入れての授業展開を試みる。

【着眼点】単元構成と具体的支援の工夫

「できる」「わかる」「かかわる」喜びを「活用する」喜びに発展させ、確実に体育的学力を身に付けられるような単元を構成し、その構成に応じた具体的支援を工夫する。

【着眼点】評価計画を位置づけた単元構成とその評価を生かした具体的支援の工夫

学習活動における生徒の反応や目標への到達状況から、その単元構成や生徒の状況における教師の具体的支援のあり方が適切であるかを判断する。

「評価基準」に基づいてその生徒の状況を把握し、具体的支援の工夫をする。

(2) 公開授業について

保健体育科の指導目標について

質問：授業の単元計画は、各担当者で立てられるのか、それとも保健体育科で構成されるのですか。(青森県)

回答：年間指導計画に基づいて各学年、学期ごとに計画しています。例えば柔道の授業は、1年生の3学期に実施するクラスマッチに向けて初心者の方から授業を始め、約30時間の単元計画で試合ができるように工夫しています。その他の単元についても各学期ごとのクラスマッチに向けて授業を構成して、試合・ゲームができるように指導しています。

質問：授業を見せていただくと、生徒さんの人間関係が大変良いと感じました。クラスの雰囲気づくりや生徒の帰属意識の形成について、どのような取り組みをされているのか、またクラスマッチ等の学校行事と授業の関わりや実施時間の取り扱いについて教えてください。(沖縄県)

回答：学校行事と体育授業の関わりについては、学校の活性化という観点から重要なものとなっています。クラスマッチ等の体育的行事は、すべて学校行事です。各学期・学年ごとに行うクラスマッチを念頭に授業の単元計画を構成して、試合やゲームに向けてグループやチームの連携や協力体制を促しています。本校には、生徒会活動のスローガンに「チーム福工」というものがあり、生徒の帰属意識、連帯意識の醸成に大きく影響を与えています。例えば、2学期に実施する2日間の体育祭に向けて1学期の行事である新入生の宿泊研修に各学科の3年生リーダーが同行し、校歌、応援歌、集団行動等の指導を通じて生徒同士の交流を図り、協調や融和の精神を養い、福工生としての自覚を高めています。

質問：各学年における保健体育科指導目標を決めているのですか。(大分県)

回答：本校の生徒は、6割が就職するという状況を踏まえて挨拶をはじめとする自律心の育成に力を入れています。1・2年次は、クラス単一の授業であり、基礎・基本の育成及び自主的活動を促すことを目標にしています。3年生では、3クラス合併の形態で選択制授業を行い、選択の幅を広げながら個人の活動を重視して、主体的に責任を持って行動できる態度等を養っています。また3年生では、3年間クラス替えがないため、特に他学科の生徒との交流を図るように配慮しています。

柔道の授業について

質問：男女共修における授業の工夫について教えてください。(福岡県)

回答：男女の人数割合によって、指導内容を構成して授業展開の工夫をしています。男子に対しては乱取り等のダイナミックな練習の場面を多く取り入れ、女子には受け身や簡易的な試合等を取り入れるようにしています。

質問：授業の進度について教えてください。(大阪府)

回答：授業全般を通じて、安全面の配慮や相手のことを考えた行動がとれるよう指導しています。単元計画では、1年間の授業説明や授業に対する心構えの指導から始まって7～8時間目まで受け身や寝技、立ち技の約束稽古等を中心に基本練習を行います。クラスの進度によって違いがありますが、10時間目前後から乱取りを導入します。20～30時間目でクラスマッチに向けての審判法や試合の進行が行えるようにしています。

質問：体育的学力を向上させていくために、評価をいかに工夫されているか教えてください。(石川県)

回答：授業最初のオリエンテーションで、シラバスによる授業内容やスキルテスト等の提示を行います。毎時間の授業では、生徒に「柔道ノート」を活用させて自己評価や形成的評価を取り、知識・理解、思考・判断等の体育的学力を高めていく工夫をしています。また「教師の観察ノート」により、生徒の関心・意欲・態度、運動の技能等を観察し、「つまずき」のある生徒や個人の課題を明確にすることにより、次回の授業では生徒の問題解決を図るための授業改善に役立てた。柔道ノートの活用では、はじめは「痛い、きつい」といった否定的な評価も見られましたが、徐々に仲間に対するアドバイスができた、協力、声援、他者の補助といった肯定的な評価に変わっていききました。



バスケットボールの授業について

質問：元気が良く、グループ内の発言がポジティブな発言ばかりで部活動のような雰囲気でしたが、生徒間のネガティブな発言（きつい、だるい）はないですか。もう一つは、体育館での授業でも帽子を着用させているのはなぜですか。（熊本県）

回答：生徒に対しては、能力の違いはあってもあえて言わないようにしています。指導やアドバイスも肯定的（ポジティブ）にムードを盛り上げるように配慮して否定的（ネガティブ）にならないようにしています。帽子の着用は、どの単元でも授業開始時の準備運動では着用させています。

質問：各グループのリーダー育成が非常にうまく成されているが、工夫されていることは何ですか。（石川県）

回答：公開授業を行ったクラスにおいても、専門的なバスケットボールの経験者が少なく、体育委員や各グループのリーダーは、様々な部活動生を中心に構成しています。部活動生がムードを盛り上げてリーダーシップを発揮することによって、他の生徒も積極的に協力したり活動するようになり、全体的な雰囲気も向上しています。



4 指導助言・まとめ

指導助言者：香川大学 教授 山神眞一 先生

(1) 成果

発表校である福岡工業高校生徒達の元気の良さは、特筆するものがあり、学校の長い伝統に培われた生徒たちの頑張っている姿が印象的であった。研究については、全般的に新学習指導要領に則した授業内容であった。

学習内容の明確化がなされたバランスの良い内容であり、技能、態度、知識・思考判断といった生徒の体育的学力を育むために十分なものであった。

指導と評価の一体化が見られた。学習内容の評価においては、保健体育科として指導の観点を工夫しながら授業に取り組まれている。

教材開発の工夫が見られる。柔道授業におけるグリッド学習、バスケットボール授業においてゼッケン番号で技能程度を表したり、役割分担をする手法等は、グループ学習や課題学習の面からから見ても効果的であった。

通常の武道授業は一斉授業になりがちであるが、グリッド学習によりグループ学習の方向性が示唆されている。バスケットボールでは、チームの状況や場面に応じてグループ学習を効果的に取り入れている。

運動観察の導入。柔道のグリッド学習では、見取り稽古を取り入れることにより安全面の確認や技術の向上に繋げている。バスケットボールの学習では、作戦・戦術のあり方等を他チームを観察し、グループで話し合うことにより効果を上げている。

学習の展開においても「できる」「わかる」「かかわる」喜びを「活用する」喜びへと発展させる授業内容であった。

学校行事（体育的行事）と保健体育科の関連においては、学校全体として取り組まれていることが、学校の活性化、生徒の帰属意識の高揚や自律心の醸成に影響を与えていることが理解できた。

(2) 課題

柔道

- (1) 礼法に重きを置きすぎる面があるが、本時はスムーズであった。
- (2) 対人性や伝統・文化の継承を念頭におく。
- (3) 演武性・技能のできばえを評価する。
- (4) 学び直し授業の必要性和生徒の実態を踏まえた授業内容。
- (5) 対人性...柔道における引き手の重要性（相手を重んじる態度、安全性）

バスケットボール

- (1) ゴール型の集団的スポーツであるが、個人と個人の向かい合いを重視する。
- (2) ボールを持たないときの動きの指導を更に工夫する。
- (3) 人間関係能力の育成。
- (4) 運動の社会的能力の育成。
- (5) 自己有能感の醸成。